

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業（学士）
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
1986年3月	同大学院（印度哲学印度文学専攻）修士課程修了（修士）
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
1990年3月	東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
1991年4月	日本学術振興会特別研究員（～1993年3月）
1998年4月	愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授（～2004年1月）
1998年10月	博士（文学）の学位取得
2004年1月	愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わるところでは、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また、当時の僧侶の仏身観にも焦点を当てて研究を行った。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる止観と呼ばれる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを旨として研究を進めている。

c 概要と自己評価

2018年4月からは2020年3月までの間は、科学研究費（挑戦的研究）で研究代表者を務め、「仏教学、心理学、脳科学の協同による仏教の止観とマインドフルネスの実証的研究」と題して、三年間の予定で研究を進めている。その一環で、オーストラリアとベトナムに現地調査を行い、仏教の瞑想の実態とマインドフルネスの世界における広がりについて、知見を深めることができた。二年目の2019年度には仏教の瞑想の歴史を中心に、インドから日本にわたる展開の概説を「瞑想のダイナミズム」と題して執筆し、臨川書店から共著として出版する準備を進めた（出版は2020年度に入る）。また、2016年度からアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門の部門長としての任務が続いており、こちらに多くの時間を割かざるを得ない事態が続いている。『法勝寺御八講問答記』の翻刻は若干の進展しかできていないことが惜しまれる。日本の戒律に関する研究は、唐招提寺を中心に思想的な展開を再考している。最終的には多少、仕事が過剰気味と思われ、また広げた仕事が多くなりすぎている感があるので、この点の調整を、同じく今後の課題としたい。

d 主要業績

(1) 論文

蓑輪顕量、「寺僧と遁世門の活躍—戒律・禅・浄土の視点から」、ザ・グレイトブッダシンポジウム論集『中世東大寺の華嚴世界—戒律・禅・浄土』、12、71-86頁、2018.3

蓑輪顕量、「日本古代における『大般若経』の受用」、柴原永遠男・佐藤信・吉川真司編『東大寺の新研究 東大寺の思想と文化』、71-94頁、2018.3

蓑輪顕量、「セッションNo.1の発表に関するコメント」、日本仏教学会叢書『人間とは何か』、197-204頁、2019.3

(2) 解説

蓑輪顕量、「オーストラリア・マインドフルネス調査旅行記」、『仏教文化』、58、184-196頁、2019.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、叡山学院、「天台の止観とマインドフルネス観」、2019.3

非常勤講師、東洋大学大学院、「日本仏教文献研究」、2019.4～2020.3

特別講演、叡山学院、「天台の止観とマインドフルネス」、2019.7

特別講演、亀田生涯学習センター、「マインドフルネス/心の観察法—仏教の伝えた悩み・ストレスを超える道」、2019.7
セミナー、日蓮宗現代宗教研究所、「鎌倉時代の法華経観」、2020.1

特別講演、公益財団法人 仏教伝道協会、「台湾の仏教—拠点寺院と盛んな修行/禅七と仏七」、2020.3

(2) 学会

国内、日本印度学仏教学会、理事、評議員、常務委員

国内、日本宗教学会、常務理事、評議員

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

国内、KIERA-LP 学会、会長 (2015.10～)

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事